

を揚げた時のことであった。

(早稲田大学)

僕の窪町界限

横 田 忠 夫

今年の4月の初旬、お茶大の地理学教室に久しぶりに御邪魔したのだが、旧館にあった昔の教室のあたりをうろついて見当たらず、近くにいた高校生からまだ抜け切っていないような可愛い学生さんに尋ねてやっと教室にたどりつくことができた。

講義の後、事務室で式先生に昼食をとるよい場所を伺うと茗溪会館の地下にあるグリルが落ちていてよいと云われたので、早速その日から毎週金曜日にはそこのテーブルに腰を落ちつけてゆっくりとランチを肴に生ビールを傾けることとした。ところで酔が廻ってくると憶い出されたのは長くて短いこの窪町界限と僕とのつき合いである。

昭和7、8年頃、つまり50年程前、僕は父に連れられてすぐ上の姉とこの会館のホールでクリスマスパーティーに出席したことがあった。父は高師の出身であったから多分茗溪会主催のパーティーにでも下の2人の子供を連れ出したものらしい。

クリスマスツリーと多くのデコレーションに包まれた会場の華やかな雰囲気の中で初めてのパーティーに興奮したが、ジングルベルの音楽とともに頭に浮んできた。当時僕は6つか7つ、父は僕が晩年の子であったのでちょうど僕の年頃であった。

それから10数年をへた昭和25年の初春、東大からお茶大に移られた松井勇先生をお訪ねしたことがあった。

それは旧館の教室であったが、大学院学生であった僕は松井先生に指導教官になって戴いていたので、その指導を受けに訪れたのである。その時指導の他に東大付属の講師になることを勧められ、その年の4月から中野にある付属に通うようになり、やがてそこの専任教官となった。東大付属の教員は既婚者が多く、独身の若い者は男2人、女性2人であった。

食べ物もなく、楽しみの少ない時期であったからか、その中からまもなく一組のカップルが生まれた。それが僕と家内である。

家内は女高師の数学科の出で、数学科の亀谷先生の推めで東大付属に赴任してきたのであった。

そして家内は結婚後、お茶大の3年に編入学して数学科の学生となり、僕はその父兄となったので卒業までの前後にたしか3回窪町を訪れている。

始めは編入学が決まらぬ前に2人で数学科に呼び出しをうけた時（あれは父兄面接というやつだったのだろうか！）、そして女房の在学中、ケンブの演奏会が講堂で催された時、そして卒業式の3回である。

卒業式は女房の妹も同時に卒業したので2人の父兄として出席したが、今考えるとすでに27才になる息子も女房のお腹の中でこの式には列席したことになる。

その後は学会がお茶大で開かれる時とか、確か僕の初めての著書を松井先生にお届けしに行った時とか、たまにお邪魔するだけであったので、文教育学部や理学部の新館にはまだお目にかからなかったのである。

しかし、お茶大地理出身の方とは、東大付属の僕の後任になられた讃岐（小野）さんとか以前に山梨大にいた時卒論のお手伝いをした金子さん、都立大時代同僚であった和田さん、三輪（太田）さん、僕が指導教官をした野村（須磨）さんとかお付き合いは多くあり、家内の友人の中に大学に残った人があったので何時も親しみは感じていた。

僕の講義は9月までの半年、大学院生3人というこじんまりしたものであったが、トランジスタラジオ持参で音楽や朗読と一緒に聴くなどしたのでどうも学生諸嬢をビックリさせたようであった。

ともかく、授業後の茗溪会館での昼食が目的で

あるかのように休講もせず毎週通い続け、又式先生や家政学部原ひろ子先生に后餐会を Grill で開いて戴きもし、昼食の後、赤い顔を気にしながら恩師の辻村太郎先生のお宅をお訪ねしたこともあった。

今でも緑濃い窪町界限のお茶大生の往き来するなごやかな通りの風景や、講義中に聞こえてきた高師付属のグラウンドからのザワメキを時々憶い出しては一人で懐しんでいる。

(山梨大学)

変動帯の地形学

吉 川 虎 雄

W. M. Davisの浸食輪廻説が世界各国に与えた影響を評論したR. P. Beckinsaleの論文(Geogr. Rev. 66, 1976, 448—466)には、日本やニュージーランドにおいてDavisの学説が歓迎されたと述べられている。その記述は大筋において正しいが、1976年に書かれたものとしては、その内容にいさゝか抵抗を感じざるをえない。しかし、よく考えてみると、このように評論されても、それに全面的に反論できない点のあることも事実である。

基本的には急速な隆起とそれに引続く長い地殻の安定期の存在を前提として構築されたDavisの浸食輪廻説は、本来地殻変動の活潑な日本やニュージーランドにおいてその妥当性が吟味され、改訂されるべき性質のものであった。まして日本では、Beckinsaleものべているように、Penck父子によって提唱された地殻変動と浸食とが同時に作用して展開される地形発達理論がよく知られていただけに、Davisへの傾倒が大きかったことは理解に苦しむところであろう。

これに対して、日本やニュージーランドでは、地殻変動によって形成された変動地形の研究分野において、世界的に見てもすぐれた業績があげられており、地殻変動論や地震予知などにも貢献しているという声がある。しかし、変動地形もその形成過程においてたえず浸食作用をこうむっていることを見逃すわけにはいかない。そして、変動地形の研究成果から地殻変動論に言及するに当たって、その形成過程に作用した浸食の効果を検討しなければならない場合も多い。したがって、変動地形の研究を変動帯における地殻変動と浸食作用とによる地形発達理論——これを変動帯の地

形学とよぶことにする——にまで発展させることによって、地殻変動論などへの寄与も一そう大きいことが期待されるときに、浸食輪廻説を克服する途も拓けるであろう。しかし、日本における地形研究の現状は、その段階に達しているというには程遠いものがある。

このように書いてくると、あたかも地形研究の局外にあったものが日本の地形学に加える批判のように聞えるかも知れない。しかし、私は約40年間地形研究にたずさわってきたものとしての反省をこめてこの小論をしたためているのである。私は、異なる前提に立ったDavisとPenck父子の理論の対立が約半世紀前に不毛のまゝに終り、その後この点について研究の進歩がほとんどなかったのは、地殻変動や浸食作用による地形変化の速さが定量的に考察されなかったところに、その一因があると考えている。近年これらの作用はあるていど定量的に論ぜられるようになったから、変動帯における地形発達を改めて考察することも可能であり、それは地形研究に新生面を拓くものとなるであろう。

昨秋からちょうど30年ぶりに、場所は変わったが、お茶の水の教壇に立って、再び地形学について語るようになってから、その間における地形研究の歩みを顧みることが多くなった。そして、本来日本において開拓されるべきであった変動帯の地形学がいまだにその形をととのえていないことを、自責の念をもって考えるようになった。DavisやPenckはとっくに乗り越えたような勇い声をきくこともあるが、変動帯の地形学が確立されるまでは、日本における地形研究がDavisやPenckの